

<資料紹介>

『靈交』にあとがきを記す。(1)¹⁾

——香川県大島の療養所をあらわす点描——

阿 部 安 成

「あとがき」を読む 霊交会は、1914年11月11日に香川県木田郡庵治村の大島にある大島療養所で組織されたキリスト教信徒の会である²⁾。その創設からの歴史は、『全国ハンセン病療養所内・キリスト教会沿革史』（日本ハンセン病者福音宣教協会、1999年）に掲載された27の教会のなかでも、第4の長さとなる。1919年に霊交会は、機関紙『靈交』の発行を始める。当初は、「長田兄の編集により毛筆で第一号を十部発行」したという。霊交会よりその設立が古い、松丘聖ミカエル教会(1912年)、外島家族教会(1912年。現在は呂久光明園内)、黎明会(1913年。現在は菊池恵風園内)でどのような刊行物を発行していたのか、いまそれを示す材料を知らないが、『靈交』の創刊は療養所内教会のなかでも古いほうであり、また1940年まで長期にわたってその発行が継続していたことにおいても、稀有な例とおもう。

ただし、いまのところみつかった『靈交』の最古の号は、表紙に「参卷四号 大正拾壹年拾月一日」と手書きされた1部である³⁾。毛筆書きだったという創刊号は、発行元である霊交会でもみつかっていない。大島外では、長島愛生園の神谷書庫に、霊交会所蔵分と重複するいくつかがあるにすぎない。霊交会図書室にある初期の『靈



写真1 『靈交』第3巻第4号と第5号の表紙

1) 本稿は2009年度財団法人福武学術文化振興財団瀬戸内海文化研究・活動支援助成による研究題目「瀬戸内海域のハンセン病療養所における情報集積と交流」の成果の一部である。

2) 霊交会の歴史については、とくにことわないかぎり、石本俊市「霊交会五十年の歩み」（笠居誠一ほか編集委員『霊交会 創立五十周年記念誌』大島青松園霊交会、1964年）による。

交』は、「大正十一年度」や「大正十二年度」などと墨書された半紙切れがつけられ、それぞれ年度ごと（ただし多くは1月から12月まで）に紐でしばられていた。

第3巻第4号は、謄写版（ガリ版）刷りの26頁（表紙をふくむ。ノンブルなし）で、その表紙には、「靈交」の文字と花のイラストがみえる⁴⁾。このころの謄写版刷りの『靈交』は30頁前後の仕立てになっていて、のちに活版4頁立てとなる紙面とくらべると、機関誌とよぶにふさわしい体裁である。表紙裏には、長田穂波による巻頭言ともいえる「セセラギ」がおかれている。これ以後ほぼ一貫して、この「セセラギ」は穂波によって記されてゆく。つぎの号、第3巻第5号は「創立紀念号」となり、「靈交会歌」、江本安一「紀念の辞」、軒雀「創立より現在迄の略歴」、三宅清泉「思苑 紀念日を迎へて」などにくわえて、こののちの号にはほとんどみられなくなる、女性(ゆき女)による文章(「活る声」)もあり、また穂波による「編輯後記」もおかれている。

「編輯後記」はその後、毎号に掲載されたわけではなく、ときに「会報」、あるいは「編輯室より」という名の欄が載り、そこに、靈交会への来訪者、会員の動向、療養所のようす、編輯子の随想や主張などが記されてゆく。『靈交』のほぼ最終頁ちかくに載るこれらの記録は、大島にある療養所の全貌を明らかにすることはないだろうが、しかし、療養所が発行する創立25年や90年などを祝福するためにつくられた記念誌や、自治会が編んだ自己の活動記録とは異なる、療養所のなにかしらを伝えているとおもう。

いま靈交会図書室でみられる『靈交』はほぼ月刊紙で、1940年12月10日発行の第265号をもって最終号となる⁵⁾。『靈交』が刊行されたこの時期に、大島で

3) 靈交会にある『靈交』については、阿部安成「国立療養所大島青松園キリスト教靈交会蔵書について―香川県大島の療養所を場とした知の蓄積と発信」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.107 (2009年3月)にその目録を載せた。なお時期によって表紙に「靈交／会報」と印字された号もあるが、本文では紙名は「靈交」に統一した。

4) さきに記した巻号数と発行年月日は、もともと印字のうえを手書きでなぞったようにみえる。

5) こののち1973年7月15日付の『大島靈交会週報』が「靈交／復刊／No.1」として発行される。復刊にあたっての所以はなにも記されていない。これについてはまたべつに書肆情報目録をまとめたうえで、論じることとする。

療養の対象となった病は、「癩」とよばれていた。本連載では、「癩」者の療養のために設けられた療養所のなかで、その管理者ではない団体が長期にわたって発行し続けた稀有な逐次刊行物である『靈交』の、そのあとのほうの紙面に掲載された「編輯後記」などを翻刻し、それをとおして、療養所の内外における交流と、療養所のなかで生きられた生（^{せい}life）を考えることとする。

『靈交』が育つ 『靈交』の編輯子——これは刊行の全期間をとおして、長田穂波が担ってきたといってよいだろう。のちに彼はみずからの名を編輯人として紙面に明記する（嘉吉の名もあげる）。彼にとって『靈交』は子ども、あるいは生命あるものだった。「十二月号が生まれました」⁶⁾、「ヤッと斯んなものが生まれました」⁷⁾、「本日コンナものが生まれました」⁸⁾、「斯んなものが生まれました」⁹⁾とくりかえされる表現で『靈交』の発行をあらわし、ときに、「好いキリヤウではありませんが、何処となく愛らしい無邪気で捨てたものでもありません」や、「かなりキリヤウよく出来ました」¹⁰⁾とその出来ぐあいを気にかけ、うまくゆけばそれをよろこび、抱くように、愛すようにと喩えて『靈交』をかわいがることを会員や読者にもとめていた。表紙に「非売品」と印字された号もあるこのころの『靈交』は、無料で配布されていた。

「斯る誌でも御読み下さる方が御座いますれば御知らせ下さい、喜こんで御送りします」(R: 3-5_*)、「靈交御入用の方は遠慮なく御申越し下さい、無代で喜んで御送り致します」(R: 4-4_23)と無料での受領がすすめられていた『靈交』は、しばしばそこに記される受洗者や「会友」に配布されたり送付されたりしていたのだろう。その会友がふえたことで、『靈交』はおおよそ100部の発行となることが予告された¹¹⁾。機関紙の「成長」のとき、その創刊

6) 穂波「編輯後記」(REIKÔ KAIHÔ No. 12. 1, 1922年。以下、R: 3-6_22, と巻号数と発行年を略記し、それらが推定のばあいは斜体字とする。＊は執筆者や発行年など該当する情報がないことをあらわす)。

7) ＊「会友諸兄姉へ編輯子より」(R: 5-3_24)。

8) スイハ「編輯室より」(R: 5-4_24)。

9) ＊「会報」(R: 5-5_24)。

10) スイハ「編輯後記」(R: 4-1_23)。

11) ＊「会友諸兄姉へ編輯子より」(R: 5-3_24)。

から現時へ至る推移が想起されている——「最初八部丈肉筆で作りましたものが十五部となり、謄写版の御寄贈を戴きまして三十部となり、間もなく一躍六十五部となり、遂に現在の八十余部」にまでなった、これも霊交会によせられる「熱愛」のたまものだというわけだ。この育ち盛りと喩えられそうな生命の勢いをめぐっては、イースターにさいして、「霊交誌も追々理想境に近附けるやう育てまして、相成るべく多くの失望者、敗残者など霊肉の病者乃友となり度いと祈つて居ります」と¹²⁾、慎みのある謙虚な育成が願われていた。だがその成育、いいかえると配布範囲の拡大は、「幸ひ満州、朝鮮、北海道辺まで、神は御用ひ下さりつゝ、御座います」と、帝国の版図と重ねあわされて想像され、それほどに広い領域に『霊交』が送付される可能性に「感謝」が唱えられるのであった。

予告から4か月が経ったところで、「霊交も百部刷る事になりました」との報告があった¹³⁾。

受洗者と会友がふえるにつれ、『霊交』の発行部数も増加していくとともに、霊交会にはいくつもの「贈物」が届けられていた。贈り主のなかには、岡山医科大学の田中文男やS.M. エリクソンがいた¹⁴⁾。頻繁に大島を訪ねているエリクソンが、「沢山書物」を寄贈したとの記録がある(R: 4-9_23)。どのような書物なのかは記されていないが、霊交会図書室には現在、「高松市浜ノ町／エリクソン」のスタンプが押された図書が2冊ある(『基督の四肖像』1912年、『聖フランチェスコ伝』1915年)。おそらくこれらが、エリクソンの寄贈した現物なのだろう。こうして蔵書がふえることで、「霊交文庫はにぎやかに飾られました」と「月報欄」は記している。どれだけ認知されて使われていたかはともかくも、当時は「霊交文庫」という名があったとわかる¹⁵⁾。

12) スイハ「編輯室より」(R: 5-4_24)。

13) *「会報」(R: 5-7_24)。

14) 田中文男と霊交会との交流については、阿部安成「長田穂波の痕跡—療養所の生のあらわし方」(『ハンセン病市民学会年報2008』ハンセン病市民学会、2009年4月)でふれた。

15) この霊交文庫にさらに図書がふえて現在の霊交会図書室の蔵書となるのだろう。およそ2000冊の蔵書については、その目録を前掲阿部「国立療養所大島青松園キリスト教霊交会蔵書について」に掲載した。

島内外にむけて靈交会の活動と精神を発信した『靈交』があり、また、島内外からそこに集うひとびとがいて、いくにんものひとたちによって手紙や図書や教えがもたらされていた。靈交会は、隔離施設としての療養所をその活動の場としていたが、療養所外の多くのひとびととのつながりに支えられてその運営が成り立っていたといえよう。

編輯子の気概 「編輯後記」「会報」「編輯室より」「月報欄」は、署名があってもなくても、それは長田穂波が執筆した文章とみてよいであろう。「スイハ」も穂波の筆名である。穂波は多様な文章を『靈交』に寄稿し、前記の『靈交』100部への増刷を予告した編輯子から会友諸兄姉への告知ではあわせて、「私の処女作「伝道者の涙」と言ふ宗教小説のマネごとを書いて見度い」とその計画を掲げていた。そして次号(R: 5-4_24)から、ほなみ生による「小説 伝道者乃涙」の連載が始まる(「筆乃すさび」ともある)。自身がいう穂波の最初の著作は、現在みられる彼の単行本には収録されていない。

小説の執筆とその公表という穂波にとってのあたらしい活動が展開しているこの時期の『靈交』に、穂波は機関紙発行の意味を書き、それをとおした自己省察をおこなっている。「祈りと「靈交」とが唯一の活る道です」、あるいは、「一度病魔に奪はれました現実社会が「靈交」の増加と共に復活して参る事は、何より嬉しく思はれます」と、『靈交』への執筆や刊行、そしてそれがひとの手にとられ読まれることをとおして、自己が「活る」のだ、と述べている。べつに言えば、『靈交』を拠点として自己の生を模索している、となろう。

穂波は自分たちを、「私共は井の中の蛙同様で有ります」と自覚する。それは島の療養所において「一定の区域外には一步も^{〔ふ〕}踏み出せない者」だからだ。だが、「それは少しも不足と存じません」といい、しかし、「時々広い世界が恋しくないことも有りますが」、でも、「矢張り此所が一番幸福の地と考へられます」と、くりかえし逆接の言葉で心情をつないで、大島の療養所をもっとも幸福な場所と受容しつつ、「世間見づ」とみずからを定めるのである。「井の中の蛙同様」の穂波たちを理解するのが、靈交会に集ったり『靈交』を読んだりする受洗者であり会友となる。「私共病者の心理は皆様のみ察して下さる事と存

じます」と編輯子が記すとき、そこに想定されている結びつきは同じ病むものたちのあいだにだけあるのではなく、信仰による結合が相互理解につながると期されている。だがそこでは、信仰であれ親交にせよ、それらによるひととひととのつながりに、病むというどうしようもない現実がくわわるのである。会友諸兄姉が「何の隔てなく御熱愛をそゝいで下さる事」が、自分たちに大きな「慰安と生甲斐」を与えると感謝しつつも、その事態を「天刑病と言はるゝ立場に居る者以外の夢想だに出来ぬ事だらう」と突き放してしまえば、信仰結合も断絶する暗転が望見されることとなる。わたしたち病者をあなたたちが理解してくださることを、わたしたちがどれだけ感謝しているか、これは病者にしかわからないだろう——とは、病者と非病者の境界を超えた相互理解の成就をあらわしたといえるかもしれないし、病者のほうから依然として自分たちの周りには外部との隔たりがあると指し示したのだともいえよう。穂波はこののちも『靈交』を発行し続けてゆくのだから、それ以外に「活る道」がないと『靈交』をつくり続けた穂波にとって、自分たちをとりまく隔絶感はぬぐえなかったのだ。



写真2 『靈交』第5巻第3号の表紙と第7号の裏表紙。「真生命」の文字がみえる。

そうした穂波たちにとって、療養所は「別天地」となった。関東大地震による震災を伝え聞き、被災地と療養所との生活を対照するなかで、「徒食の民なる我ら、斯の秋にも大平楽な日送をさして戴」ける「別天地」にいるのだと感じ入り¹⁶⁾、暑中の見舞いを挨拶するとともに、「島の大変涼しい別天地」にいることを、「斯うした土地に置いて下さつた事ハ、誠に有難い事で

御座い升」と感謝する¹⁷⁾のだった。そこが真の樂園なのか、現世の苦界なのかはともかくも、「別天地」といいうる大島で、療養所で、穂波は「生命の偉

16) スイハ「余滴」(R: 4-10_23)。

17) *「編輯後記」(R: 5-8_24)。

力」あるいは「生命の真価」を見出したのである¹⁸⁾。『靈交』も「生命」が籠もっていなくてはならない。「部数の増加も嬉しいが・・・社会から何程歓迎されても万一、同人と其の記事に生命よりの発露なる真紅の血が流れて居ないなら、廃版しても良い」との宣言があった¹⁹⁾。大島の靈交会で、『靈交』は生み出されたのだ。



『靈交』のあとがき

- 見出しは、執筆者、表題、掲載紙、巻号、発行年月日、備考の順とした。
- 執筆者名や巻号数、発行年月日の記載がないばあいには*であらわした。
- 執筆者の署名は表記のとおり記した。発行年は元号表記を西暦にあらためた。
- ／は改行を、〔 〕はルビもふくめ阿部が記したことを、■は一字の、[]は複数文字の判読不能をあらわす。
- 適宜、カンマをうち、原文の○傍点はただの傍点にかえた。
- 二文字以上のくりかえし記号は書きかえた（たとえば、「メリーメリー」）。
- 同音異義の誤字については、煩雑となるのを避けるために〔ママ〕のルビをうたなかったこともある。
- 第106号以降の入力には、滋賀大学経済経営研究所の研究サポートを得た。
- *『靈交』*、*〔表紙に手書きで「参卷四号 大正拾壹年拾月一日」〕

穂波「編輯後記」『靈交』第3巻第5号、創立記念号、*

「□記念号だけに会員が読むと強いヒントを与へられますが、他の方々には縁遠いやうに聞こへるか知れませんが、紙数と経済がゆるせば思ひ切り書いてもらひたかつた・・・靈交に親まれる先に会を御紹介することが出来るのを大変喜びます／□細いながら煙を立得て居りますことは、宝座の天父の「我とめり」と仰せ下さる事と信じて居ます、皆恵です・・・斯る誌でも御読み下さる方が御座いますれば御知らせ下さい、喜こんで御送りします／□俄に寒くなりま

18) ほなみ「編輯後記」(R: 5-7_24)。

19) ホナミ「編輯室より」(R: 5-6_24)。

した、虫の歌もはとまり^{〔マ マ〕}、寂寥な冬枯が迫り来た感じがします、雪が降る、水が氷る、水仙が匂ふ、クリスマスが来た、こんな想像が早起します、皆様の上、殊に病弱な方の上に恵あれと祈つて居ます（穂波）」

穂波「編輯後記」REIKÔ KAIHÔ No. 12. 1, 1922〔印字表記、表紙に手書きで「大正十一年十二月号／第三卷第六号」〕

「□十二月号が生れました、好いきりやうではありませんが、何処となく愛らしい無邪気で捨てたものでもありません、何うと多くの人に抱いてもらい度がつています。／□紀念号の会歌は譜が少し違つて居ります／亦歌詞二節は「讃美へ謳はむ秋の夕^{くれ}」です、訂正します。／□次はクリスマスと新年兼号です、近く追ひかけて発行致します、お互に楽しいクリスマス、祝福の内に心ゆくばかり御祝い致しませう／皆様の上に祝福あらむ事を祈上げます。（穂波）」

スイハ「編輯後記」*〔二つ折の半紙を綴じた冊子の表紙が欠落し、手書きで「大正十二年一月号／第四卷第一号」〕

「◎メリーメリークリスマス、確に世界に大きな光が輝い居る、私共はそれに全く包まれている事を切実に感じられます、遠からず宝血の流れと聖肉の土のより美しい霊花が地球を咲き包みて薫る風が昇るでせう、高ふ高ふ神の聖座まで人世の前途、楽しいです。／◎大島のクリスマスは十九日でした、教師や兄弟達が沢山御来島下さいました、亦役所の御方も多忙な時間を御割きになつて御参列下さいますし、日曜学校の催も上出来で外の寒さにひきかへ、心熱く楽しい集ひで御ございました、幸ひ海上も静かで皆様の御帰路も好都合で、真に祝福されました、感謝の外ありません。／◎「霊交」もかなりきりやうよく出来ました、皆うれしい（スイハ）」

『霊交会報』，1923年2月1日〔表紙に手書きで「大正十二年二月号／第四卷第二号」〕

穂波生「会報」『霊交会報』第4巻第3号，1923年3月1日

「一月廿日、佐伯兄（求道）は右足切断された、其病床に於ける吟『病床に伏して祈れば人知れぬ神の恵の溢りける哉』であります。／▲一月廿二日・・・高松より救世軍の旗手大尉、藤沢少尉御来島され、会員の証言あり、両師の教

話あり、楽しく潔い時間を送りました。ハレルヤ／▲二月二日・・・国分の小早川姉より御親切なる慰問状を下さった、其内に『北風』の身に沁む今日の寒さにも父の御胸に居る暖かさ、同姉と共に集ふ兄姉の爲め熱禱して居ります／▲二月六日・・・エリクソン師、宮内師御來教下さいました、其日菊沢元兄受洗しました、他の求道中の兄姉も一日も早く決心せられん事を祈る／▲二月十一日・・・林雲柱兄、片足切断されました、其より四十度前後の高熱が続いて居られる〔 〕兄ら交代夜中看護して下さい、感謝／▲近来・・・風邪にて求道中の婦人にして入院する者三名、昨今は少し快方に向ふて居らるゝ、内外祈る事多々あります、凡に神の栄光あれ、アーメン／▲靈交誌・・・多くの方に愛せらるので大変悦びます、来月号より私共の実歴史を述せ度いと思ひます、小さくとも確い確い靈の叫で有度いと存じます、もし御氣附になりました点がありますなら、御忠告下されませ、悦んで享受し、且つ改良致します、今月号は祈禱号の考へてもらいました／尚皆様の大多なる御同情を深謝致します／▲我会の集・・・は毎、日、水二回と毎日夕四時半より祈禱會があります、月曜夕婦人集會がありますが、昨今は一寸休会しています。／(穂波生)」
穂波生「窓外一望（一九二三、三、三）」『靈交會報』＊、1923年4月1日〔表紙に手書きで「第四卷／第四号」]

「新聞を見て誠に驚くことは、殺人犯の多いのと近来学校乱と労資の爭議である、毎日是らが二件以上記載されない事はない、亦昨今には水平社と国酔会とか奈良県で大衝突をして居る、社会は乱脈だと思ふた。せめて真面目学研の爭議は善いものだと思はせられた。／処が政治上の問題に口出しして使節脈遣に反対し、自宗の勢力如斯的対度に出るなどは、一寸宗教家の頭も曲って居ると思はせられた。斯る事で御大自ら出馬して上り下り幾度する熱心を、御自分の家の子同胞の不平を解結してやるためにソ・イで置けば、奈良の争乱を未前に防げたものを等、一寸大人らしい考へを起させられた。科学者や社会主義無神論者が教会へ近付いて神の大愛に抱かれつゝある、誠に善い事だ、然るにソレラの多くが印度のガンジーに見習ふのだとは、基督教にとって一寸皮肉だと苦笑させられた。議會は党略騒ぎ、先見の明なき自分は心配らしい心になった。

／噫此の死の社会を救ふは誰ぞ、キリストの復活を信者の内に現実する処にのみあると強く祈らされた。(終り)」

スイハ「編集室より」同前

「黙って居ても集まる原稿が復活で充たされて居るのが、アタラに嬉しかった・・・天も地も教会も信者も新らしい生命の歌を唄ふ手拍子と足どりと、凡が和して甦りの強い交響楽をなして居る。／今月は創立以来の永眠者の記念会をせられる予定で、種々なる思出が早胸を突いて来る、楽しみに事だ、我霊よ醒めて仰げよ・・・・・・／会報の中「一生懸命」は其社より寄贈です、訂正します・・・霊交御入用の方は遠慮なく御申越し下さい、無代で喜んで御送り致します、花は咲き心の中に鳥はなく、神を頌へて人は行く、信仰の道を・・・復活々々・・・・ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ／(スイハ)」

穂波「会報」同前

「▲三月六日、エリクソン師、宮内教師御来教。宮内数市兄同ツル姉受洗さる。十日、右兄姉の催しにて受餐会あり／快食快談、誠に楽しく過しました。／▲・・・鈴木みよ姉「求」過日片足切断さる。然るに大した発熱もなく痛もなし、経過良好し／▲・・・林友吉兄ほとんど全快。一時は医師さへ死の宣言ありしもの。鈴木姉と言ひ皆感謝々々／▲・・・川岡村の溝淵様より事務所齊藤氏を通して宜敷と、御親切なる言伝へ下さいました。天恩、同姉の上に豊ならむことを祈ります。／▲・・・回春病院の中原姉より御葉書下さいました、延引のお詫と感謝とでした、姉の上に祝福あれ。／▲・・・九州の病院の石橋兄姉より感謝の御手紙でした、同兄姉が燃ゆる信仰に復活され、熱信神人のため尽さるゝ事は嬉しい極みである、天恩の下益々永生の道に前進せられむ事を祈る。／▲・・・大分の仲津の富田とよ先生より御親切なる御書面に接しました。先生は今度職を休まれ、大阪の方へ行かれるとの事です、前途の祝福を祈り上げます。／▲・・・「雑誌現代」高松の笠井様より、「聖書研鑽」其社より、「福音新報」宮内先生より、「一生懸命」無名氏より御寄贈下さりまして、喜んで輪読致して居ます、御礼申し上げます／(穂波)」

スイハ「月報欄」『靈交会報』＊，〔1923年〕 5月1日〔表紙に手書きで「第四卷／第五号」〕

「▲十一日にエリクソン師御夫婦御来教下さいました。此日、宮内先生は奥様御病気の為め、御見えがなかった。其かわり高松水上警察署の阿賀巡查部長殿が御訪問下さって、信仰実験談をして下さった、御話しの内に強い奨励と教訓が加味されて居たと存じます。／亦同日佐伯兄が受洗の光栄に浴しました。ハレルヤ／▲二十二日に昇天者記念会がありました、思出深い集りを致しました。／近況／久しく遠去かりし子供達が帰り来ましたのと、病床の兄姉が全快しましたのとで集りが賑やかになりました。十七日に江本兄が自宅へ帰られたので、淋しく思ひます、亦江本兄後へ石本兄が小学校の先生になりました。／▲・・・川岡の溝淵看護婦様より秋山氏を通じて靈交の感謝と会員へ宜敷の御言伝へでした、同姉の上に神の祝福を祈る（スイハ）」

編輯人「会報」『靈交会報』＊，〔1923年〕 6月1日〔表紙に手書きで「第四卷／第六号」〕

「▲一日・・・エリクソン師、モーア師、宮内師と高知市のマキルエン師と御来教下さいました、来月は聖晩餐式が挙行下さる筈であります。／▲十一日・・・良子女王殿下御派遣の慰問使吉本侍医博士下さる。／御深仁に感泣し、謹而迎送しました。／▲十三日・・・メソジストの徳先生御夫妻外三名の兄弟御訪問下さる、式後には音楽会を開いて下さいまして喜しく過しました・・・殊に本日は日曜故、特に備船にて御来島下さった事は、感激に絶へません。未信者も沢山見えて居りました、盛会でした。／▲廿一日・・・エリクソン師、宮内師、高知のブレデー師が突然御来教下さったので、雨中にもめげづ楽しい集会を致しました、尚ブレデー師は病室の島本兄（高知県人）を枕頭に親しく御見舞さいました。」

スイハ「会報／くわいはう」『靈交会報』＊，〔1923年〕 7月1日〔表紙に手書きで「第四卷／第七号」〕

「▲五日・・・エリクソン師、宮内師御来教下さる、此の日帰米せられ居たるマンロー師久振りにて御来教下さって、共に無事を感謝しました、師の前途祝

福あれ／▲同日 七味兄、松山兄、鈴木姉の三名受洗さる／亦聖晚餐式を受洗後挙行下さる、一同感謝！！」

***「会報」『靈交会報』第4巻第8号，〔1923年〕8月1日**〔表紙に手書きで「第四巻／第八号」〕

「▲七月六日・・・・・・本日エリクソン師及宮内師，例会の為め御来島下さる，出席者五十名余ありました。／亦国分の小早川様と川岡の溝淵様とより，御親切なる御慰問状を下さりました／両姉の上に天恩豊ならむ事を祈ります。／八日・・・・・・本日大阪の石田音松兄より御親切なる御書面と同封にて贈物を戴きました，一同御あつく感謝して居ます／天恩大兄の上に裕ならむ事を祈ります。」

***「編輯室より」同前**

「梅雨が晴るゝと直く暑さが参りました，早や子供が浅瀬でチャブチャブと『弟は顔に泥塗る泳ぎ哉』を実顕して居ります，青葉の下を流るゝ微風に湯上りの肌をなぶらせて，讚美歌の練習も真によろしく，『夕顔棚の下涼み』の詩以上に平和と真実と崇高と自由とを味ふ事と存じます。殊に弱い体の処有者なる兄姉の上に恵みあれと御祈り申し上げます。暑中は私共の生活を幾分でも神の芸術としてユタツリと過し度いと存じます。」

***「月報欄」『靈交会報』*，〔1923年〕9月1日**〔表紙に手書きで「第四巻／第九号」〕

「▲六日・・・・・・宮内先生と近藤進氏，佐藤氏と辻正直兄，久保兄と宮内先生の御令息二名と御来島下さいました，大変楽しい集会を開きました／▲エリクソン師より二回に渡り，沢山書物御送り下さりまして，靈交文庫はにぎやかに飾られました／▲倉敷高松分工場の井上孝様，石井寿様より雑誌部（靈交）の方へ厚き御同情の贈物を戴き感涙致して居ます」

***「編輯室より御あいさつ」同前**

「早三十日以上も雨がありませんので，島も相当暑さを感じます，敬愛なる皆様御変は御座いませんか，私共会員は皆々御恩寵の内に感謝の生活を経続して居ります，御安心下さいませ，暑さと共に信仰が眠り易いのに驚きます，其内に刈入れの秋も近付いて来ます，互に大声に醒し合ひつゝ，刈入れの主を迎

へませう、皆様の上に天父の恵、裕ならむ事を祈上ます、アーメン」

***「月報」『靈交会報』*、〔1923年〕10月1日〔表紙に手書きで「第四卷／第十号」〕**

「▲林姉妹の入会されましたことを喜びて居ます」

スイハ「余滴」同前

「何度考へても本年の災害は悲惨の極みで、脳裏から離れません。殊に別天地で中には芝居の催しでも致されつゝありますが、徒食の民なる我ら、斯の秋にも大平楽な日送をさして戴く高恩を深く銘謝いたして居ります。亦一面会員はクリスチャンとして或る強い使命感を抱く者であります、平常は兎に角く斯る際には真情より火花を発する赤い血を先祖より享け、殊に喜悲を共にするキリストの洗礼を頂いた魂、東空を仰いで実に涙ぐましい思ひに充たされ……何か御奉公をとの志願がヒソカに湧き起ります、幸ひ常に会の生命とする祈禱を国家の難みの中に打ち込み度いと存じて居ります。／今月号は製本の都合で月報に先生達の御来島を記入せられませなんだ」

***「九、十月会報」『靈交会報』第4巻第11号、創立紀念号〔1923年〕11月1日〔表紙に手書きで「第四卷／第拾壹号」〕**

「▲九月廿五日、エリクソン教師、宮内先生御来教、尚本人は彼の震災地なる東京より帰られたる宮内光兄の震災火災実況を承り、悲惨なる光景を見る如く感じました、亦宮内先生は大阪、神戸方面の視察談をして下さりました／私共は祈らねばならぬと深く想ひました／▲十月九日、今日はエリクソン師御夫妻と宮内先生、亦徳島のローガン師の御嬢様と御来島下さいました／▲同日、玉木キク、松永タケの両姉受洗の光栄に浴す、ハレルヤ、尚受洗後聖晚餐式挙行下さる、一同靈に充されました。／▲十月は余病併発の為め重病室に入院する兄弟姉妹六名もありましたが、今日では皆快方に向はれました／▲靈交誌に対する御便りを別に欄を設けて述せ度いと存じましたが、単なる会報としてはそをする事は印刷法規上から申しましても手続をしてない故、面白くありませんし、亦此の事につきまして或る御方の御親切な御言葉もありましたので、編輯子感想のみを記しました、今後も時々御便りを願ひ致します／▲会創立して満九年、

其間の出来事を回顧しましては、唯花は散る人は過ぎ行く時は経り残るは神の愛一ツ」

***「月報」『靈交会報』追悼号，1923年12月1日**〔表紙に手書きで「第四卷／第十二号」〕

「▲十一月六日，祈りの人三好松一兄永眠さる／▲十六日，送別式に宮内師御来島下さる，一同深い思出と哀別の情に充さる，静肅なる内に式を終る／▲廿七日，エリクソン師，宮内師御来教，本日，花田兄受洗さる，ハレルヤ／◎尚，クリスマスは本月十九日，賀筵を開かる筈にて日曜学校生徒は準備に熱中して居ります。メリーメリークリスマス／◎皆様も御繰合せの上御来会下さらば幸甚と存じます／尚，ブローグラムは別紙の通りです。」

***「編輯室より」同前**

「祈りの人を送りし事は，誠にをしい次第です，何卒兄の後をつぐべき祈りの人を与えられむ事を祈って居ます，桜の日に生れ菊の月に昇天せられし兄は，真に信仰的詩の人であった・・・溢れ出る如き言々々々が其祈り全体にわたりて詩そのまゝであった，同席の者は皆々其祈りに由って潔められた。噫今や其祈りのオーソリッチーは神の^{ママ}ものとに帰られた，斯くして追悼号をものして居ると，兄の声や俤がありありと見えるやうだ，我らは祈らねばならぬ，兄に亦あふ日迄」

***「会報」『靈交会報』第5巻第1号，〔1924年〕1月1日**〔表紙に手書きで「大正十五年度／第五巻／第一号」〕

「十二月十九日，待ちに待ちにたクリスマス^{ママ}を致しました，何より案じた海上も静かで，諸教師諸兄姉の御来会を仰ぎ，プログラムも好都合に終り迄祝福されました，一同大いなる希望を新に抱き，深い感謝に充されて居り升，是皆天父の恩寵と皆様の御熱禱の賜と信じ，厚く御礼申上ます／亦，田中博士，岡田教師，丸亀教会，モーア師，秋山兄，築地教会，エリクソン師等より送物を戴きました，是亦御礼申上升，御蔭で「靈交」も一層広く成長〔 〕事をゆるされました，神よ器となし〔 〕アーメン」

穂波「編輯後記」同前

「新しい頁が開かれました、私共の生命は高い理想と剛健たる歩調を以て、過去の記録を破って意義あるレコードを作り度い、勇しくスタートを切りました、世活の決勝にをいて如何なる点数を示すかは、楽しい事です、何卒御声援を下さませ、やゝもすればニブリ易い歩み、只新しい奮起は皆様の御援助による処です、一少年は会より遠退りました、それは彼の為め悲しい事です、……生命なき枯葉が散る事は根樹の益です、新しい青葉は其処から沢山芽〔 〕希望は風の中に輝きます。」

***「会報」『靈交会報』第5巻第2号、〔1924年〕2月1日**〔表紙に手書きで「第五巻第二号」〕

「△一月十五日、エリクソン師、宮内師例会に来て下さる／△本日、藤田利秋兄、秦伊三太兄受洗乃光栄に浴す／△十七日、日曜学校生徒木戸武志さん、健康者なる故にて退所、岡山県玉島へ行かれた、前途天父乃祝福を切に祈る／△島本兄、佐伯兄乃病長し、一日も早く全快せられむ事乃為め御加禱下されたし」

スイハ「編輯室より」同前

「亦関東に震りましたネ、是でもか是でもか是でもかとばかり、タ、キ付けられた態です、其上に内閣を不承認とか何とかヤカマシイ事ですネ、実に国家多事だなアーと蔭ながら心配致しまして、祈って居ります、然し復興の年頭に皇太子御成婚を奉祝致す事は、真に嬉しいことで前途に希望が輝いて居るやうで、美しい幻が胸に浮びます、此の際馬鹿騒ぎはよして真心より御祝ひ申し上げませふ、剛健なる精神乃奥より力ある声で万歳を叫びませふ、信仰乃復興は国家復興の礎であります故、福音宣伝者の為祈りませふ／(スイハ)」

「会友諸兄姉へ編輯子より」、*****、*****〔切断されて残った表紙に手書きで「第五巻三号／大正十三年三月」〕

「□此度は発行が大変遅れました。原因は原稿の為めと私の多忙とです、ヤツと斯んなものが生れました、御笑覧下さい／□次号より紙面の都合がつきましたら、私の処女作「伝道者の涙」と言ふ宗教小説のマネごとを書いて見度いと存じて居ります／□現在までの紙数では何も書くことも出来ません、一月号の

如く字数を節約して文態を悪くした上、行を詰め込むでは本当に泣き出し度くなります、かと申して十二分にしては第一経費が続き兼ねますし、誠にイタシ、カユシ、と言ふシレウマになります、モウ致し方がありません、処より一好案を得ました、ソレは発行度数を少くして紙面も部数も十二分に致すことであります／□何もそなに迄して発行せいでもよいでないか、「靈交」が大して世の益になるでなしと申される方もありますが・・・然し私共は活き度いのです・・・亦同じ境遇の友を一人でも多く活かしたいものです、「活き度い活かし度い」と言ふ他に何の考へもありません。ソシテ祈りと「靈交」とが唯一の活る道です／□皆さんを単なる会友とのみ思ひません、生命の対象です・・・私共が現世の生命も希望も事業も存在も皆さまによつて、大きくも高くもして下さつて居ります、皆様の前には自暴自棄になれません、皆様の愛に由つて何者も呪へなくなつたのであります、皆様を思慕する処に、祈禱の力を加へられます、そこに楽しき生活が続きます／□尚現在、島に住す私共が永眠した後にも、不幸なる病患孤独の兄姉の存在する限り、斯うした感謝に活きる道として「靈交」も存在する様、祈つて止まないのです／□幸ひ皆様の御熱愛によりまして、会友が増加しまして百部近く発行する事になりました、最初八部丈肉筆で作りましたものが十五部となり、謄写版の御寄贈を戴きまして三十部となり、間もなく一躍六十五部となり、遂に現在の八十余部で御用にアイ兼ねる程と成長させて頂きました／□一度病魔に奪はれました現実社会が「靈交」の増加と共に復活して参る事は、何より嬉しく思はれます、真に人間らしく活かして下さる事を改めて御礼申し上げます／□私共病者の心理は皆様のみ察して下さる事と存じます／□腐敗した水も流れ口を得る時、殊に遠く流るゝに従ひて清まり、且つ活きて来ます如く、発病と共に濁つた血と精神も斯くすることに由りて潔まり改まり、復活する実験を致します／□然し斯くして活かして下さる方は、キリストに由れる兄姉の外に多くない事も誠であります、キリストの血と肉とに関係ない方は斯うした病者などの心理や境遇に真の理解を致して下さりません／□父の聖旨を行ふ者、是我母我兄弟なりと仰せられた御言葉がシミジミ心に浸み込まれます、此処に私共が此の大島に居ても、他宗の

病者と色カワリの日送りをなす事が出来て居るのであると考へまして、神は活きて在ますと信じます／□追々春もとゝのひて参ります、何卒御体を大切に、鳥の如く唄ひ花の如く香る御日送りを遊ばされます様、天父の祝福、皆様の上に裕ならむ事を祈らして頂きます（一九二四、三、一）」

*「会報」同前

「△二月二十一日、エリクソン師、宮内師例会に来て下さる、実は十二月に御来島下さる筈の所、都合上十五日と延引し、その日は風波の為め遂に二十一日となりました、その都度会員一同、誠にキオチ言はん方なし」

スイハ「編輯室より」『靈交会報』第5巻第4号、井一スター号、1924年4月1日〔表紙に手書きで「第五巻／第四号」〕

「△三月十一日、エリクソン師、宮内師御来教下さいました、蓄音器御持参下さつて、一同楽しく其の日を過しました／△一金拾円也を岡山医科大学附属医局長田中博士より雑誌部へ御寄贈下さしました、厚く御礼申し上げます／先生乃変らぬ御深愛に一同何程か慰められます事か、感激いたして居ります。／編輯子も新しい勇氣を得まして、早速四月号の準備に取りかかりました、本日コンナものが生れました、御覧下さりませ／△会友乃御一同の御同情（然かも私共の志を御理解下さつての）に添ふやう、力一杯乃務めを致しませふ、幸ひ通信伝道なども好都合に恵まれつゝ有りますし、島内（是は中々一通りでない骨折です）でも多少認められかけて居ります、只神と人との靈乃前に謙遜に奉仕致します、結果乃可否は神に任せて進みませふ／△靈交誌も追々理想境に近附けるやう育てまして、相成るべく多くの失望者、敗残者など靈肉の病者乃友となり度いと祈つて居ります。幸ひ満州、朝鮮、北海道辺まで神は御用ひ下さりつゝ御座います・・・・・感謝・・・・・／△私共は井の内の蛙同様で有ります、一定の区域外には一步も踏み出せない者です、然してそれは少しも不足と存じません、デモ時々広い世界が恋しくないことも有りませんが・・・・・デモ矢張り此所が一番幸福の地と考へられます、斯うした世間見づですから、延説なり思想なりが皆様に縁遠いものゝやうな御感じをお与へするかも知れ^(ママ)など心配いたします、何か変りし面白いお話でも有ります時はご通

知下さらば、幸甚の至りで御座います／△井一スターが来ました（主の復活）
 是は基督信者にとりまして、新生命の泉であります、陋習や其の他の網を断滅
 して、日々新しい天地を創造する能力ではありませんか、如何なる中でも復活す
 るの一つは勝利の輝きです、互に一新いたし勇ましき歩調をもつて前進致しま
 せふ、宗教的にでなく真に人乃子としてキリストの弟子として！」

***「会報」『靈交会報』第5巻第5号、永眠者記念号1924年5月1日**

「■四月十五日、高松よりエリクソン師、宮内師同夫人及び宇多津の原友安兄、
 同氏友人^{〔ママ〕} 兄御来島下されて、例会を開かる、会員大喜びである／■その
 時、昇天されし島本繁馬兄の葬儀を執行さる、来会者多数／■岡山六高に御子
 息教育中なる植田まき子女史、広島に開かれし信徒修養会よりの帰途わざわざ
 御廻り下され御来島、種々尊い御感想談をして下さりました、感謝／■本会
 より九州の回春に移られた教妹中原静子女、過日永眠されました、同女は短命
 なりしが、其の生涯が無駄がなく信仰より信仰へでありしを偲びて感謝です／
 ■大連撫順の石山淳一兄より、金五円なりを靈交誌へ寄贈、亦植田女史より金
 貳円なりを同誌部へ寄贈されました、御礼申上ます／■廿日の復活日を卜して、
 昇天者の記念会を開きました／■五月号を記念号と致しました、植字工が風邪
 で他の人がヤツテ呉れました、斯るものが生れました、何卒お愛し下されませ
 ／■会報雑誌部は皆さんの御同情で大分有福になりました、部数も増加致し度
 いと存じます、此の際御心当りへ御照介下さいませ／会友皆様の御深愛を感謝
 致します」

***「会報」『靈交会報』第5巻第6号、1924年6月1日〔表紙に手書きで「第五巻第六号」〕**

「△五月六日、宮内先生御夫妻御来教下さる・・・此日、丸亀市の塩井牧師、
 原兄・村山兄御訪問下さる・・・又、モーア師、岡田兄、山田兄も御同道に
 て、誠に善き靈交が保てました・・・感謝々々／△エリクソン師は、大
 会の為米国へ御帰りとの事、本月中旬御帰高の筈、祈りつゝ御待ちして居りま
 す／△五月廿二日に、岡山市聖交会派の牧師堀六郎先生御来島下さつて、同派
 にて受洗者二名は聖餐式を挙行せられました・・・病める一羔を何処迄も尋

ねて、主の血にあづかしめる信仰、親愛には一同感謝しました・・・同派が頑固形式なりと嘲笑されつゝも、今日あるは此の精髓に由る処ならむ、キリストの真髓は外形は第二にして、精神が第一である事は、エルサレムの殿も否定せず、シケムの山も否定せず、断食も会堂もそんな外形よりも内的信仰の生命を求められ、亦与へられた・・・イエスの四福音に偶像に対する直接の言なし・・・と或る人が申されたが、面白い事に思ふ・・・クリスチヤンとは、真にキリストの生命の中に活る者なる事を想ふ／△求道者真下兄重患なりしが、近来弥々快方に向ひました、他は皆無事、感謝感謝／△高松警察の阿賀部長殿より、再三贈物がありました、大人も子供も大ニニコニコです・・・亦、笠井師よりも度々の御厚情にあづかりました・・・尚、大連の岩^べ陪兄より数度の御親書を頂きました・・・宇多津の原兄よりも贈物がありました、其の他中野太助兄よりも療養所長を通じての御親書がありました・・・大阪の石田音松兄は移転せられた旨、御通知下さりました・・・各様に厚く御礼申上ます／△靈交会も近時内部の改革がありました、今後の活動は新らしく且つ見る可きものが多い事を希待されます／尚、皆様の御加禱を御願ひ致します」

ホナミ「編輯室より」同前

「■何程立派でも盛大でも、背景が無限でないものは駄目だと思ひます、神を根^{こん}ていとせざる事業、否生活は悪魔に過ぎぬ、聖霊に呼吸せざる信仰は偶像と同じである、亦、事実に触れざる文章は嘘つきであり、生命の向上以外の宣伝は動物の叫びであると存じます／人間は其の生活の大小にかゝらず、必らず責任がある、只に人間相互間のみでなく、無限の神の前に責任がある、もし斯うした責任感のなき者があらば、確に偽善者か良心の麻痺した者である／編輯子は徒らに『靈交』を作り度くない、責任感の上に立つて前進して来たのであります／■世より誤^{ママ}触さるゝは常の事だ・・・イエスの如く一人居ても自覚した道に立ちて居り度い・・・偶像百体の中に居ても、生命の友は得られない、寺院の奥の淋しいのはそれなのだ・・・何でも生命の真叫が何程美しか『靈交』の価値はそこにあるのである／■部数の増加も嬉しいが・・・社会から何程歓迎されても万一、同人と其の記事に生命よりの発露なる真紅の

血が流れて居ないなら、廃版しても良い、何程美人でも屍は嫌だ、ヤハリ処すべきは霊にある生命だ・・・生命より出る事業は発展しなくても良い、編輯子は事業の奴隷となり度くない／■ダイナマイトは少さくとも内部に力が充ちて居る、其処に大巖石を爆発するダイナマイトが彼れだけ大きな働きをしたとて、少しの無理はない、私は無理なことは為したくない・・・それだけ内部の充実と言ふ事に心が引かるゝのである／■聞いたと見たとは雲泥の相異・・・其処には余り買ひかぶりもあらふし、見方の間違ふて居る者もあらふけれども、『靈交』にしても会にしても外形と内容と一つであり度い、白く塗りたる墓となり度くない、寧ろ外形は少いさくともダイナマイトの如く充実して居りたい・・・其処に初めて事業が生れる、大いなる事業が生れる／■今は眠りより覚む可き時きである／編輯子は自己を注視して全責任を負ふ・・・そして自己の充実の為め祈り居るものである／赤裸々が嫌な人には捨てゝ下さい、弱きが嫌でツキアハないなら、おイトマシマス・・・弱くても強くても赤裸々で活き度い／無理のない成長がしたい（ホナミ）」

＊「会報」『靈交会報』第5巻第7号，1924年7月1日

「□群馬県の高橋音市様より御親書と切手を沢山頂きました、亦、徳島県の青木駒二様より再三真剣なる求道者として御ハガキを下さいました、御両兄へ深謝します／□靈交も百部刷る事になりました、皆様の御加禱の御蔭と感銘致して居ります、今度はなるべく求道者、殊に教会に通ふに不便な方々の友となり度く存じます、御照会下さりませ／□六月廿四日、エリクソン、宮内両教師例会御来島、特に這回は宣教師大会の為め暫時帰米せられし処、師エリクソンを会員一同喜び迎へました、未信者の方も多く集はれ、大いに聖霊の充されました、神に感謝々々／磯津愛兄も共に御来島、初対面で有ります、彼の真に涙ながらの御挨拶に接し、一同も共に感泣に咽びました、永遠に神の豊かな御恵み加はらむ事を、切禱いたします／□神戸の宮内光様よりも御親切なる御文通を頂きました、会友諸兄姉が何の隔てなく御熱愛をそゝいで下さる事は、私共に何程慰安と生甲斐ある事を覚えさせられますか・・・それは天刑病と言はるゝ立場に居る者以外の夢想だに出来ぬ事だらうと存じます」

ほなみ「編輯後記」同前

「□社会ハ日米問題で矢釜敷しい事であります、切腹する人、抜刀で怒鳴り込む人、国民大会とか言ふものを開く人、開戦論を叫ぶ人、手品^{〔ママママ〕}ボッコイトを奨励する人、その中で組閣する人、奉祝踊で捕はれて警察に引かるゝ人、情死する人、自殺する人、火星に人が住むとか住まぬとか望遠鏡の下で喧嘩する人、殺人光線が発明せられたと言ふ人、否、彼は香具師だど反対する人、■国では左傾して国が危険になつたと心配する人、タゴール翁を迎へてヤンヤン言ふ人、世間の何んと賑やかな事なのだろー、然し大島は松の梢に鳥啼いて、ツ、ヂは今が花盛り、日終ノタリノタリノタリ哉で有ります、変つた事と言へば入梅に在ると言ふ日、初雷と初夕立、散歩最中一生懸命に火葬場に逃げ込み、ヤット濡鼠の難を脱したこと位いなもの、天下泰平／□近頃は本城倣心氏の私の宗教を読む、面白い、仏教殊に真宗の改革児だと思ふ、僧籍を自分より捨て、純信仰に生きて居る、然し本山から見れば異安心徒の首であろー、亦、西洋哲学史を読む、是は理屈やの店並べ珍説を作り出す頭の持主が、結局繁昌すると相場がきまつて居る、其の弟子に科学者がある、自然科学、皆さん、太陽の出る方が東です、太陽の光りは何よりも早く走るものです、それが東より西へです、故に朝は影は西に出来、夕方は影は東に出来ます、化学の説は斯ふした事実が証明する故に、事実の証明ない神や仏は信じられません、化学の証明せざることは皆嘘で有りますと〔 〕人間世界と存じます／□編輯子も大分智になりました、光榮の至りです・・・時局が右か左か何方へ転ぶとも、哲学や科学が何んと叫ぶとも、異安心問題に問はるゝとも、「吾人は吾人の生命を肯定する」、何物も見るを得ない暗黒の裡にし「吾人は吾人の生命の存在を証明する」、此生命より出発して神の存在を承認する、此の生命を中心として、社会の構成を判断する、正義人道とは生命の道であると信ずる、生命に反する者は皆不正非道である、生命が第一番尊いと存じます／□十字架でも墓でも病床でも獄屋でも、涙でも憂さでも如何なる中でも生き得る、それが生命の偉力である、遍路しても捨てられても働けなくて慈善事業の世話になるとも、尚生き得るのが生命の真価である／□路辺の松の下に伏しても孤独でも何でも、凡て

も境遇の中で善く生き得る人は、一番偉い人だと存じます／活きる事を咀ひ、活きる事を笑ふ人は、生命の力も価も知らぬ人である、若し活きる事が我鬼と言ふ者なら、編輯子是我鬼を尊ぶより外ない／□人間は永生に限りなく活きる者と成りてこそ、真の力も価も輝いて呉るのである、何時も死の影のつきまっはれる生活は、最大の不幸である、地獄はその人の立場であると思ひ升／□皆様の強く活られむ事を祈上げます／(ほなみ)」

***「月報」『靈交会報』第5巻第8号，1924年8月1日**

「□七月分〔点線省略〕エ師，宮内師御来教下さる／本日神田慶三兄，受洗乃光栄に浴す／□本月〔点線省略〕南原姉，村山兄，大道教会，亀谷凌雲氏，明石常磐兄，高橋方舟師，其の他より御親書を沢山頂き，或は励まされ，或は慰められ，或は祈禱題目など大変恵まれ感謝に充されて居ります／□本月〔点線省略〕は離会して居られし有吉兄，広田兄，尾崎兄，一度に帰会せられました，多分父は犢を屠り，此の子死にて活き，失ひて亦得たりと御喜びの事と信じ一同感謝して居ります」

***「編輯後記」同前**

「□本号ハ原稿の都合と編輯子の脳を少し痛めて居るので，頁数が尠くなりましたが，来月号にハ此の埋草を致しますから，おゆるしを願ひ升／□会友皆様から大変に愛せられまして，愛読者の加へられます事を感謝に堪えません／□編輯子としてハ，今一層内容に活きたもの，血の出るやうなものと祈つて居ります，殊に求道者方面の友となり度いと存じます／□暑さの折柄，皆様の御自愛を祈上げます／□島の大変涼しい別天地，斯うした土地に置いて下さった事ハ，誠に有難い事で御座い升」

(つづく)